

令和2年11月10日

報道関係各位

公益財団法人水戸市芸術振興財団

「第30回吉田秀和賞」受賞者決定のおしらせ

拝啓 暮秋の候、貴下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、平成2年に創設いたしました吉田秀和賞は、優れた芸術評論を発表した人に対して賞を贈呈し、芸術文化を振興することを目的として当財団が運営しております。

第30回目となりました今回は、昨年に引き続き審査委員に磯崎新氏と片山杜秀氏を迎え、厳正に審査を行ないました結果、候補書籍の総数135点（音楽31点/演劇17点/美術50点/映像23点/建築9点/その他5点）の中から、荒川徹氏の『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』（水声社 2019年7月刊）および柿沼敏江氏の『＜無調＞の誕生 ドミナントなき時代の音楽のゆくえ』（音楽之友社 2020年1月刊）のお二人に決定致しました。

例年、賞の贈呈式を行ってまいりましたが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、贈呈式は開催せず、正賞の表彰状および副賞（各100万円）の贈呈を今月中に行う予定です。

つきましては、貴媒体にてぜひご取材・ご紹介頂ければ幸いです。

敬具

受賞者： 荒川徹（あらかわ・とおる）

肩書き： 日本学術振興会特別研究員

受賞者： 柿沼敏江（かきぬま・としえ）

肩書き： 京都市立芸術大学名誉教授

[著者略歴]

荒川徹（あらかわ・とおる）

1984年、福島県に生まれ、栃木県に育つ。多摩美術大学美術学部芸術学科卒業、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。現在、日本学術振興会特別研究員。専門は、近現代美術、映像、表象文化論。共著に、『映像と文化—知覚の問いに向かって』（藝術学舎、2016年）、『カメラのみぞ知る』（ユミコチバアソシエイツほか、2015年）。

柿沼敏江（かきぬま・としえ）

静岡県出身。国立音楽大学楽理科卒業後、御茶の水女子大学大学院修士課程修了。カリフォルニア大学サンディエゴ校博士課程を修了し、PhDを取得。2001年より2019年まで京都市立芸術大学で教鞭をとる。著書に『アメリカ実験音楽は民族音楽だった』（フィルムアート社、2005年）。主要訳書にジョン・ケージ『サイレンス』（水声社、1996年）、アレックス・ロス『20世紀を語る音楽』（みすず書房、2010年、ミュージック・ペン・クラブ音楽賞）、スチュアート・ホール編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』（大村書店、2001年、共訳）などがある。

審査員の選評、受賞者からのコメントは別紙に記載しております

【お問合せ先】公益財団法人水戸市芸術振興財団

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL 029-227-8111 FAX 029-227-8110

吉田秀和賞担当 大津良夫 川崎麻里子

第30回吉田秀和賞 受賞作品

荒川 徹『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』 (水声社 2019年7月刊)

【審査委員選評】

磯崎 新

荒川徹の『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』には、芸術論、評論として、論説に確実なシステムがあります。ミニマリズムに関する著作が多数あるなか、本書はミニマリズムに徹し、論点が展開していく上での標的（アーティスト、年代、場所）が具体的に絞られている点が非常に良いと思いました。かつミニマリズムを都市、建築、工業製品、人工的なランドスケープなど「美術外」の思考と接続させて論じており、展開のヴァリエーションが豊かで、文脈が開かれています。

若手の論客として、近年の新しいメディアを含む現代的な視点によって書かれており、何より読ませることが印象に残っています。

【受賞者からのコメント】

荒川徹

ある日の留守電、その番号からスマートフォンが自動で推測するロケーションは、「水戸」を示していました。ノミネートしていることを知らなかった私には、それが受賞連絡であることは知りようもありませんでした。

この歴史ある貴重な賞をいただけることは、かつて現代音楽への関心から芸術研究を志すようになった私にとって、信じられないほどであり、たいへん嬉しく思っております。

作品の構成要素を極端に減らすミニマリズムは、美術の究極の抽象化というより、そもそも既存の人工化された風景や建築（本書では「先行抽象」と呼んでいます）に大きく影響されたのではないかと、長らく考えていました。そして私の本は、ドナルド・ジャッドが空間や風景、そして生活を統合する自らの芸術を構築していったプロセスを、ミニマリズムの作品形態の急速な変貌とともに描き出しています。

ジャッドの作品は、新しい作品形態を次々と提示し、家具制作にまで至りました。私は作品に潜む数学的秩序や、中空の構造を分析しましたが、それは美術作品でありながら、建築と音楽に直結するような、ある種の「共鳴体」と考えています。

私はこれからも、どうやって作品ができていくのかという、芸術作品の制作原理をより深く追求していきたいと思っております。まことにありがとうございました。

第30回吉田秀和賞 受賞作品

柿沼敏江『＜無調＞の誕生 ドミナントなき時代の音楽のゆくえ』 (音楽之友社 2020年1月刊)

【審査委員選評】

片山杜秀

調性音楽から無調音楽へ。その扉を開いたのはシェーンベルク。さらにウェーベルン。その続きとして第二次世界大戦後の西欧前衛音楽があり、そういう流れが西洋音楽史の進歩史観的記述において幹を成す。長年の常識と言ってよい。音楽史の教科書にもたいていそう書いてあるだろう。だが、この種の歴史記述はいつまでも通用するものだろうか。そもそもシェーンベルクは自らの音楽が無調音楽と呼ばれることに否定的だった。無調音楽をシステム化したと一般に認識される、シェーンベルクの「発明」した12音音楽についても、「発明者」本人は調性的に聴かれる可能性を認めていた。また、ヒンデミットは、音程が2つあれば、そこには必ず調的關係が予感されるので、無調音楽とは実際にはありえないのではないかと主張した。もうひとつ加えれば、日本に12音音楽を導入したと音楽史では一般に語られる戸田邦雄も、世間は無調音楽を当然存在するかのように思っているけれど、厳密に言えばそれはとても短いスパンでの転調音楽ではないかと述べた。こうした言説を音楽史の主流は無視してきたわけだ。だが、柿沼さんは違う。従来の音楽史を覆しに掛かる。無調を自明に存在し、西洋音楽が進歩の果てに到達したところにある確固たる領域とは見ない。認識の問題として相対的にしか語り得ないものとして位置付け直す。書名の表記にあるように、文字通り無調という言葉を含弧に入れる。そうすると、あらまあなんてことかしら、「正史」と思われてきたものが見事に崩れ去って行く。われわれはこんな曖昧模糊とした基盤の上にもっともらしい音楽の進歩史を語ってきたのか。心ある者は懺悔せずにはいられなくなるだろう。柿沼さんは常に権威を揺り動かす方向で音楽を語ってきた方だが、その核心部分が堂々と姿をあらわした。そういう書物である。新しい20世紀音楽史がこの本を出発点として書かれねばなるまい。

【受賞者からのコメント】

柿沼敏江

このたび拙著『無調の誕生』が吉田秀和賞を賜りまして、大変嬉しく思います。このような榮譽ある賞をいただけることは身に余る光榮です。

この本のタイトルにある「無調」とは調性がないことを意味する音楽用語です。これまで現代音楽の代名詞であるかのように使われてきましたが、この言葉を誰がいつ、どのような音楽に対して使い始めたのか、実は分かっていません。また、「無調」とはどういうことなのか、その意味も明確ではありません。そのことに気づいたのは、アメリカに留学していた時でした。シェーンベルクやウェーベルンなど、通常は「無調」とされている音楽の調性を分析する授業を受けて、こうした音楽にも調性があることを知って衝撃を受けました。それ以来、「無調」とは何なのか、調性は本当に崩壊したのかと疑問を抱き続けてきたのですが、数十年を経て、この度この問題を改めて考え直し、本としてまとめることができ、胸の支えがおりたように感じています。本書が調性と無調の問題について、皆さんに考えていただくきっかけになればと願っております。貴重な執筆の機会を与えてくださった音楽之友社、丁寧で緻密なお仕事をしてくださった編集の藤川高志さん、また選考にあられた吉田秀和賞審査委員の先生方、水戸市芸術振興財団の皆さんに感謝を申し上げます。

「吉田秀和賞」について

吉田秀和賞は音楽を中心に芸術評論に多大な功績のあった吉田秀和氏の名を冠し、平成2年に創設されました。音楽・演劇・美術などの各分野で優れた芸術評論を発表した人に対して賞を贈呈し、芸術文化を振興することを目的として水戸市芸術振興財団が運営しております。

■ 正賞 表彰状

■ 副賞 賞金 200万円

■ 審査委員

磯崎 新 (建築家)

片山杜秀 (評論家・慶應義塾大学法学部教授)

■ 歴代審査委員

審査委員長

吉田 秀和 平成2年(1990年)12月16日～平成24年(2012年)5月22日

杉本 秀太郎 平成24年(2012年)6月30日～平成27年5月27日

審査委員

加藤 周一 平成2年(1990年)12月16日～平成20年(2008年)12月5日

武満 徹 平成2年(1990年)12月16日～平成8年(1996年)2月20日

林 光 平成8年(1996年)6月21日～平成24年(2012年)1月5日

※これまでの受賞作品一覧につきましては、別紙に記載しております。

主催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

協賛：(株)葵建設工業、(株)アダストリア、サントリーホールディングス(株)、(株)吉田石油

お問い合わせ先

公益財団法人水戸市芸術振興財団 吉田秀和賞担当

大津良夫・川崎麻里子

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8

TEL. 029-227-8111 FAX. 029-227-8110

E-mail:kouhou@arttowermito.or.jp

■吉田秀和賞 受賞作品一覧

- 第1回（平成3年度） 秋山邦晴『エリック・サティ覚え書』青土社 1990年6月刊
- 第2回（平成4年度） 持田季未子『絵画の思考』岩波書店 1992年4月刊
- 第3回（平成5年度） 該当作品なし
- 第4回（平成6年度） 渡辺保『昭和の名人 豊竹山城少掾』新潮社 1993年9月刊
- 第5回（平成7年度） 松浦寿輝『エッフェル塔試論』筑摩書房 1995年6月刊
- 第6回（平成8年度） 長木誠司『フェッルッチョ・ブゾーニ』みすず書房 1995年11月刊
- 第7回（平成9年度） 伊東信宏『バルトーク』中央公論社 1997年7月刊
- 第8回（平成10年度） 該当作品なし
- 第9回（平成11年度） 青柳いづみこ『翼のはえた指 評伝 安川加壽子』白水社 1999年6月刊
- 第10回（平成12年度） 小林頼子『フェルメール論 一神話解体の試み』八坂書房 1998年8月刊
小林頼子『フェルメールの世界 17世紀オランダ風俗画家の軌跡』
日本放送出版協会 1999年10月刊
- 第11回（平成13年度） 加藤幹郎『映画とは何か』みすず書房 2001年3月刊
- 第12回（平成14年度） 該当作品なし
- 第13回（平成15年度） 岡田温司『モランディとその時代』人文書院 2003年8月刊
- 第14回（平成16年度） 湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモニュメント』
水声社 2004年7月刊
- 第15回（平成17年度） 宮澤淳一『グレン・グールド論』春秋社 2004年12月刊
- 第16回（平成18年度） 有木宏二『ピサロ／砂の記憶 一印象派の内なる闇』人文書院 2005年11月刊
- 第17回（平成19年度） 該当作品なし
- 第18回（平成20年度） 片山杜秀『音盤考現学』アルテスパブリッシング 2008年2月刊
片山杜秀『音盤博物誌』アルテスパブリッシング 2008年5月刊
- 第19回（平成21年度） 岡田暁生『音楽の聴き方』中央公論新社 2009年6月刊
- 第20回（平成22年度） 白石美雪『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー』
武蔵野美術大学出版局 2009年10月刊
- 第21回（平成23年度） 椎名亮輔『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』
アルテスパブリッシング 2011年9月刊
- 第22回（平成24年度） 新関公子『ゴッホ 契約の兄弟 フィンセントとテオ・ファン・ゴッホ』
ブリュッケ 2011年11月刊
- 第23回（平成25年度） 末永照和『評伝ジャン・デュビュッフエ アール・ブリュットの探求者』
青土社 2012年10月刊
- 第24回（平成26年度） 通崎睦美『木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』講談社 2013年9月刊
- 第25回（平成27年度） 榎木野衣『後美術論』美術出版社 2015年3月刊
- 第26回（平成28年度） 立花隆『武満徹・音楽創造への旅』文藝春秋 2016年2月刊
- 第27回（平成29年度） 平芳幸浩『マルセル・デュシャンとアメリカ
一戦後アメリカ美術の進展とデュシャン受容の変遷一』ナカニシヤ出版 2016年7月刊
- 第28回（平成30年度） 堀真理子「改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』一演出家としてのベケット一」
藤原書店 2017年9月刊
- 第29回（令和元年度） 沼野雄司『エドガー・ヴァレーズ—孤独な射手の肖像』春秋社 2019年1月刊
- 第30回（令和2年度） 荒川徹『ドナルド・ジャッド—風景とミニマリズム』（水声社 2019年7月刊）
柿沼敏江『＜無調＞の誕生 ドミナントなき時代の音楽のゆくえ』
（音楽之友社 2020年1月刊）